俳諧縁都嘉序　東濤六了

宇宙曾大洲六。一曰亞細亞。粟細亞之中無崐崙。嵓窓東南謂之九丘。又東而者國。夷人自稱曰日出處。稱九丘曰日没處。日人之生洋要名ニ爾志東之歌。西之詩一也。貝ラ之宿連歌。摘

乎詩之不能盡有雅有連歌然
後世有其俳諧體者流謂之俳
主縉紳諸名家不必雖悉
之奪朱哉柳大雅之義也俳諧
者不取世專謂之俳諧滑稽者
貞徳宗鑑二子始爲之倡及芭
蕉氏起一洗二子者醜孔肥雪

膚而自粲焉於以掉鞅乎文囿
囿之廣蕪不知幾萬里見焉而
從者去來學者丈草焉如
旗俗之其角支考之徒執鞭之
世當今之時聞焉而知焉獨有
吾也有翁之者張之藤瀬横井
氏爲藩者姓也張之汲園制

公二十命太史祿命之二千
樞要祿又加五等賞而擢要之
官與祿實昇平良哉風月長
者也。學而仕之而優吏事精明
不牧不乱温厚沖和之氣粹然
蓋手西指塚以多疾辭退罷
遯築律呂少壯書劍餘力依

此是晩年遊高郡。向種峻絶
為人自然金玉其什與世相忘而
人不知與翁相許章及其什。
為三絶之木不改態又不知乘
崖與物絶張以異於是乎華葉
集作者今後續若出名同儀
塚蓋之川王文雅之所落也

未議琢磨也。詩之鷄鳴子規之文

捷乎力靜乎。嘆乎。俳諧之樂乎。

清警諧叟。如朱紫散亂從併有。

然是以鼓吹喬嘗獨得之。謹見不

經遊頌乃西行之音。無能存焉。

之變体精者。求請於先生張翁

幕譯也。有所於戈之矣。且餘中不遠

僕曰蒲云不鄙何狐之耶。序

以為俳諧之標云明和庚寅冬

中浣雅生湖登揲筆於

無可了鄉

凡例

○蕪居君句集嘗て梓行ありて
蕪居君集に漏たる物あり上木の後
もれたる作あり拾ひ集て後編とす

○蕪居君梓行を辞しかまへて之を請て
其集に載て世に發せん

○隠君嘗て句稿に自記しある
埋草（アリシカ）わりしより是を用ひて跋言とす

○世に出し稿になりぬるもの寸 二集
を以て遺せしハ前にきれ
他の事しるにわる抽集に載せられぬ
外く絵にわる事を定むるられ
○蓬和の半若干ありしかハ[illegible]
[illegible]洋篇は引きもれ一小冊跡
集の様様を

く

堀集　中掃庵也有著
月堂　文雄輯

春部

松のあれ里に初めの名所は
けさよりも梅の雪ふる雪れ松
門まや酒盛し秋ハわかみのち
松風の里こそ門かさり
干物にならん里かし初め

生きもやと又おかいなり　祇磨
ワかりしを昭浅拭よや初磨
いつぬわし又拾ひなり　宴り道
若水や井戸かへとしを流なり
まうもまや方のうへ摘む若菜ハ
そゑの神を雪をぬらはし若菜売
うれん若し浜ハて色く若菜摘
六種の秋は根深茎れ浪まち
気ようそおろに来めて芹ハ
七種や火燵に寄り摘せおち
様おやを雪を集し兄ろ若菜ハ
河むなつて谷を蒲次郎御の庭
芹鍋子赤も門敲く人ハなし
遊のくるいを待るれ　素納
寒しき月のまれ　おう
点つけて掛かれ　答らん

恋なきれ猫より痩く梅の花
條を續く白ひさへ鳥に梅の花
雨くもりたる白ひなき梅の花
梅咲比根深さし鼻にきたり
礼者のちらもよ門やむめの花
梅か香や下手の鼻にもまかせ
御出かけの身に助けらや梅の花
ふるさとおちこちに吹梅や小瀬

乙見の咲淋アや雪見に海苔殻
池物に足袋ぬくよしや梅の花
凍とけや筧(カケヒ)て隙の通ひ船
鶯や右川も物干竿の先
うくひすの声のきこゆ高に初音かな
鶯や風なひしく鳴まくれ
宿をかへて町へ中声を井桁子
炭売や炭売声の鳴勝れ

常も旅しくれり帝か 縁月

さくらさくの庵に咲きし 眺月

鶯や鶴に氷をわすれ

うくひすをきゝてこけゆる 和吉氷

鶯や来ぬに卿れ候ひけり

星まつりて川きよし 池の 縁月

月のおぬ閉て 星に信れ 縁氷

小花のくもりに 障子や 縁月

行く傘さしに 鴬て 縁月

鹿おきる 鶴の 松や 朴花月

枇杷の 鐘ゑかゝ や 於保路月

ふしぎの 峰より見えて 縁月

紗窓の日や 夜会れ 更けし

紅梅や 白ぬき 傍も 仕廻う時

飛くもりに 行折 柳氷

屋根 暮ゝ 一日 根ん 根氷

凡そ今新らかりけり柳 汁
汀しぬ条かりし川辺の柳 汁
風ゐて本身に吹れ柳 汁
旅一羽辰賊る雨のやる哉
まつ宿てさ清ふにもむ柳 汁
無年て飛れ常世ヶ春戸の梅 汁
雷屋のおほかりわる柳 汁
生門を二つ宿て柳 汁
いゝまて法人の宿も柳 汁
秋露世りやきさ草の大鍬より
出にさいし筆抜きれ露 汁
ありふる人有りし二日見る蔵
二川之前里見ぬれおや鐘
とん今かりもれ清く暁の鐘 汁
花鳥川鳴てやわく鐘ふ
傍の猿来のおそやならく鐘

明ほのへ簾おろしけり蛙ヶ苗
ちられぬにあくられし峰か川氷
浮生にあそふ惆悵とあられ桂
哀傷に大工か翠も揺木兮
若蝉しに緑竹林の雨潤氷
まれ雨やたちぬれ餅の果
色々すさ鶯もしなほしくし
けふ為に于一首いふ比雲雀氷

夕かすみと二度に鋒し白き氷
虚無僧のおもむきたてる雲雀氷
冥は哭さすかに露は氷
冥字れ庭の簾笑や純子の声
虫なくるさ木にも蝉もの純子の声
こさ姫の袖紙の川て雑子の枝
あれなくも春のかはやまし秋て
大抵も鼎をむりしに猫の恋

そ玉や一寸ゆれも猫の恋
帆柱に破れ蓑や朧月
はしらや蝶は扶けて日つし
燕や都の桑枝をぬけてけり
こちよまて隣へわれてきれ
田植羽を返しさ八ヶ恩笠縞哉
又の世を持はあか田かし夏
此村の新茶て風にあすなゆ夕りぬ

茶四月海さらてめて涼ぞ化
鯉一羽漁人の逢く島や夜ぐげ
足弱の田に蔵出屋の名残哉
ゆく屋や是田月孫見鳴一羽
白魚や寒さにかけて結屋
吉人罷や花や曇も見しれて氷岳
大根の茶やひまして丸郷人
茶の花や村を来近に是恋　子城

寄倍さる人の垣根や木瓜の花
木瓜の咲けや佐保姫は汁仕事
蜂の巣や山卦雨みそ腐
あをくまる八幡近潮干狩
家々も物の流よ潮干哉
海士の子乃飢墨ろく汐干狩
庭くおる鯨入桃のつぼくる家
摘菜よりさくら人の涌潮干狩
傘うり汁押し苦芽鯨の衣かな
よき貴汁むりやおつ風萬八兄のなれ
桃さくや男子の佞りまさ寡し
梅桜おとゝ兄白しろへの花
築閏めく桜を桃もし山まとは
逢ひのろ目かれ香おさのをれ汁
売る冰や緑より先に気ゆらぐ
郷路えの山には桜子や逢桜

紅ゐ以さし人やはすしの山桜の
山吹や頭のなく急ぎ行旅
春さきる 柳さし仕迫はれ花の花
柳かく松さし 重なる花の舞
川さ水れや山の巖さ乗を記け
行春やうし 仏の名れより
花さし粉衣佐迫うて春暮 花
中く春なや初にまてうれ文の字

紅ノ春の 緑に今や いくの使ノ
市に 瀬れ春の名物や凡中
川春の 濤やさうて 善の浪
ゆくされや 古道に 行き末原の宮
申く春や 船の名物の 桜 投に
行春や 花に中る 津く人 心

夏部

世の中は人乃腰見る袷かな

衣更や市中は結ひ小袖風ゆ

剃りを兼の木代れおハ七夕

け葉の花は蓋もすゝ蛾ふや衣え

先きりけぬ心や茶の了纏かへ

冬はらに柳りまけて若葉かな

木のもれ 晴さも夏の壮いり口

鶯も四十なく若葉哉
去年の雪も重かさねし高公
村の衣年に加へ遊ぞけれ
庭の園もはる以也喜し時雨
浪花屋にこゝ川御代時雨
傳年ありしく子たちも聞きけれ
翁の草も千井に同じ哉す
目りえ寺郎いも候し時雨

待ちも夕に乎や歌く遊
高ゝ枝花の露見や枝ア
紀年へ秋の末く悔や時雨
折足了わ初音の指や郭公
古川年へ村るの浮葉や時雨
赤く見れ恩水も山村もしるし
識仰も指され雨や保養これ
六月や又待同じのあゝし實香

春のくれ坂や朝日の消して見る
春の海や並ぶ玉川気佐華
このくれや足音てきぬすれ雨の庵
春の空やてふさへなくての雪紀良
春の花や屋根にちりて庭の雪
宿の花に鳥さへ啼く月夜かな
葉桜や傾きしれ見ぬまで花一ツ
鶯は鳴きつのけん満ち花葉な

初ノかほ蝶の白さし木下やミし
風やの果てぬけん握や夏木立
秋まで去ぬ一夜や木下闇
みしかよや立て菱とさかりの桂
何の気を飛ぶまで見てれ紋も於
出女とに鈴のよれ夕紀くれ
吟じれさん坂をえまうて色葉な
雨けはし星や坂もの初くのう

肉のかしと向きに這入れば坂あれバ
芦の屋から火ともされる海の蚊あれバ
山の人里に雲さそれ坂やうれバ
青梅や葉の陰の微生富
竹の子や一節ありて生へてきらば
筆やわきに角ある折られ
刈られしきる坂や路跡に坂あれ
心ふくまさるる麦の秋

一 十文錢やわまかまれる 証坊と
お寺から引出し 初茶を
初なりや蛭が麦の粒あれバ
鳥の浮珠ならかられ茶の花なる
世の人なり虎してをみれバ 初茶を
京の奴の袴に世話都しまる嵐
京新の円舞に掛れる為バ
凡そのかし細うる思ふ苗を

笠とりの立へ出字や田植笠
菰おりとぬりも草取て田か茶ら
作物おえて中まと笑ふ狗子帰れ
餅ハ御さ絵をなつ衣佐生会
凡りまこち菓椛家螺の卯ま花
芝川まけや錦八尺張る楷から
初餅や墻折八尺ねて蛻一ツ
一八一里まく餅おとく柱本作

い薑りの餅やみるの寒さかな
鵆川家にた火を芦ふ下や川蛍
敗そを遊ひて蛍かまのゝ図家作
夫をたる出て蝉千流て蛍名乳
油から侍川りそ草らく蛍名紙
円て一ツ隣へ出る月家作
いつかたに抓むき鵆川蛍かな
傍みちの濡まそ汁をむ蛍かな南

はかなくうつる世へをも合なる
盆ち川たらす星へたらぬ図ル
挑灯も隠にて尽して星から
松尾の一夜ぞそれうつるなる
細川玉て吟ハぬら近くぬ来
まし(?)はむハるなき露作
はれをしの岸の声やあやし来
ふゝ木や泉とけてはハ雪きまき

旅な松風も吹あきも四方
朱橋のうし後見よきも四ル
滝とおれ角の諸掛に蛸半
羽子の鶴や小町の体世辛新婆より
落出のあたに打ハ出雁や糸の虫
藤のあに狩りせて人や帰るらん
蓮の浮な経むて近れやかハつよう
まの花や捨むしく見る腐し舟

沢瀉や蘆にまぎれて咲ながら
夏草や麦かりし跡の片隅
なつ川草の露や不断の以也葉
制札を立る筆もふりかけて
七夕にみし町く絹出か貴ほく
菓子以祝の駄々わり杜若
白以見にこ町く紅や杜若
模留々尋ねてはまた仏の菜

米粽のまきまゐらせしけしの花
薬しまし佛はかさね茎の毒
わすな世の花盗人や仏留
露のみえ総々上え出る今の沼
雨に吹くれ千成ひさご蓮の花
笠のうら鐘の音嫌ふや石会の沼
山守の柿さへ八ちて雲のそら
堂ちにまゐる名もわれ法音花

ねことをかさし宵の月
紫陽花や早く思ふを浅くす
おもふにも侍る星影にかり
星影の影や地震の露にも
むかしや扇しる手に遠かる
星合を待ひて扇く扇かな
松風のおとに絶え星の別れ
思ひ身もなし愉の精進かな

幾條を扇へとなるかなかな
笠の卯花やさくらちる花
まつり近き人の春路や菖蒲
浜の所にて時鳥せし菖蒲かな
かんこ鳥待つや六日のあやめより
絶えぬ笠の世常も見えしかんこ鳥
夕顔や花けり蝶も来りかな
夕顔や立し車を押すけり

夕顔や気おさへる　老人
猿にさへ夕顔の咲く宿かな
蓮浦しも声や赤鳴かりて子
鴬の笑や晴ならの晴鳴り
夏もれと鳴かな打こ子
こもれ声の庭にほそてなる晒
鷺にすゝ笑かるや柳の風
山もいも飛に瓢にいつくる鶴も

さみだれや小笠庭にひろき外
五月雨や庭の草ふみ残る作
梅雨晴や善光寺人ぞ之様
涼しされや浦く重る鐘の声
梅雨されやちさの子女倒れ子女庵
鶏の声手に庭様や五月晴
虫の名にすら孫も着き紙帳
物干にうちゝ朝寝の衣かな

日のもれを見てまさる氷室守
菜に須け八ま川いさ蓑清かな
新法師の柳ぬ絲も清そかな
わつゝかつ井戸をあふれし清水かな
菖蒲やゝしみ子枕もや通し
風鈴を鳴らして時鮮の暑さかな
簾入の笹川まれあり浅哉
蝉の声風鈴にてまる暑さかな

うち柏の足くむ朝戸乃暑さかな
鮮の釉やさ町ありさらふ
旅人の蠅お笑ひ川暑さかな
辻家の庭にしく吹ふあまつ之か
扇向に入かなかれあまて子哉
後風呂通ふ旅の姿や古男子
石飛川涮凍る手くまくるか
月のよき夜蚊や浴経の川向ひ

蟋蟀

草むらの声にちかしやけさの秋
咎めかし絲くり釜の白ひ哉
蚊屋帆に吹きて来るや湖の秋
こも夜の鐘つく秋なり　絵分
探れ共笛もなくしまの秋
けさの秋引しまゐけもしろう
夏の露蝉とみせてやちられ　一葉

きし竿にさゝれのかりし一葉は
ちんもなき芭蕉も一葉はおちかゝる
折しも田に笠ものゝ影見え折から
秋の扇も捨られし桐の紋まては
折角作る鐵の御せいも一葉哉
終も晦日に持ツ警者の羽織は
筥の葉比はに翻れ着かは
似きしにぬ人の梅枸や草の家

立まさる捨ひ人のおもかけは
朝顔や垣根をはなれ巌澄
華の垣やおもしきて祇詣
朝顔や鏡にうつれ口もれる
両に四つ咲く朝顔の命は
おはら白や晦ゆる蓉中きて夕まみ
明さかりし離れ若もや芝庭
積りくもれ冬に延まりての川

何の事もなかれや星のこがれより
梶葉の夜はしりあふな天の川
七夕や何の持たに目の寄
旅や婦人の忘れ橋て郭
あまかくさしう八ツ星の了實名也
目もと溺の無のあるさ名や星の恵
牛ても了もあれ七夕にまた川八出
張の河原ゝく我律儀に別れ星

蓮の葉は味噌の濁や還らう
物言はぬ無常の色や誂らう
柳緑や浮人も庵す け庵
生きて死るも世ともし誂らう
行水や気も老らぬ修羅
無ても出ぬ行にてくれ哀れ
蓮の葉は気れもなし誂らう
蓮はや盆の御前あらさまし

おどり子や秋の気色は始りきり
こし川かゝる盥すりえて棚漏れ
喜ぞ柳れ遂は高音と燈籠
播磨や内ゟもれ出す架の戸
稲妻の絶ゆかと向し明の雲
いなづまや四五とさら見てから
市中や去年近西行まてま数
只冷ゝ川見かゝの浅や絆の夕

寒てきかくて柿の落葉
廟おりく見ぞ夕暮ゝ始め入り
姫見えの新月以会石露丸
蜻蛉や強む茎に花ぞ等
掛ぞつうし浪に一枝きりも
雨のりや夕飯汁のさゝりくも
二階さくと白む笠まろ虫の声
小郎や言と会ての床や虫の声

稲妻の扉しゆふら茂くさ
むしの音やみにしみて哀れ
鳴かすれ草の葉か世しの声
物事の帛に多し世の声
閨しりあらしもの世哉
酒り人やかく年あれ夜寒哉
雪見て来てまれ夜寒哉
蕭落て神も寂れ夜寒哉

木枕の襟に夕川かしし夜寒哉
酒り人ても遠き六くされ夜寒哉
きぬ数の川釘にてまれ夜寒哉
折し刈て淋ひ聞ゆる方の海
萬の葉み恨つのしみゆる
秋風の穂ひの草のさ紀か菊
雲の峰しく作れみゆる哉
あはれや人もゆかしれ世の声

くれかゝる松の手拭や　滝山
ゝ川蛉の前に以よして　葉の花
渕明か錦は雪を嬉しへ　北
常ならにましく色を垣の瓢　北
帳売かり八ヶ所　ふくら色　北
世法なしに雨にれ松や　房の声
声の種の絳みを露し　ノの支
雀わて　四方を　帰まん涼りる

初夜や何を見拝して　都絶がら
紙らのの歡に取られ　桐撰　北
結ゝ札し　能子扱られをまふ　北
ゆくにかしこり著そし人をせられ　庫の声
関拝にして　おく色や　庫の了く
座なく　中山にふ川ふく　人心
ひよゑに　咲子や　凡の笈あられ
蝶の羽にそようかり　せれ　鏡紙花

戸を明くれはおもむき有る
雁に変りし空のけしきハ新
敷屋仕舞ふ蹄や芭蕉八枚之葉
一枚て家の墨染芭蕉なる
虫の声川纔にけしき秋の暮
物すさまし隠れ行く秋の名残
村一トウ哀しき淋しき秋の暮
ふみうき真鷹におもしき秋の暮

鶉臥して野べに来る
稲刈れるあとに添て
鳩捨し鳴き
優景

大工坊に言へ
あきの風に筆石庵
芋茎(スイキ)喜しこよひ名

梢まで待つ雨の声やしよの月
立穀も切つて添ひけふの月
名ごりや雨の夜も　以前の往[illegible]月
未熟も入月見る小舟かな
名月や小舟を出せ人の多
漏いれ草の露に名のの月
天にあり八重[illegible]雲をうれ月
経天の雨をいとはれなの月

捣干さし竿に来るきよしの月
人の月蟹も魚にならぬの月
名月や霜松青何き海の面
名月やりきえく氏無き背
海に流れ川寄る子と川べよしの月
名月や沈むなし舟し新浮かし
十六夜や一つ離れて早出
八つさんや年に欠出声の声

二十八より
三十七まで
十枚欠丁

梅干さへ紅に染まるきよの月
人の月むし蟹やくらんとこの月
名月や霜秋寄つこそ海の面
名月やりきえく氷る背
海に舟も川客子を川さへの月
名月や清め行もこし新酒かし
十六夜や一しほ濡つて草畠
いはよれや年に 欠出しの声

二十三